法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

国際アンデルセン賞受賞スピーチから読み解くヤンソン作品の変化

Kobayashi, Ayumi / 小林, 亜佑美

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化. 論文編 / 異文化. 論文編
(巻 / Volume)
16
(開始ページ / Start Page)
153
(終了ページ / End Page)
178
(発行年 / Year)
2015-04
(URL)
https://doi.org/10.15002/00010757

Hosei University Repository

国際アンデルセン賞受賞スピーチから読み解くヤンソン作品の変化
Change of Tove Jansson's works: Considering Acceptance Speeches of WINNER OF THE HANS CHRISTIAN ANDERSEN AWARD 1966

国際文化研究科 修士課程
小林亜佑美
KOBAYASHI Ayumi

序章

トーヴェ・ヤンソンは画家や挿絵画家として早くから活動していたが、1945 年『小さなトロールと大きな洪水』を出版し、本格的な作家活動を開始した。これは児童文学のムーミンシリーズとして 1970 年までに、全 9 巻が刊行され、次第に国際的な人気を得ることとなったものである。彼女は、ムーミンシリーズの後は大人向けの長編・短編を執筆し、ムーミンシリーズから大人向け作品への制作移行期には、青少年向けの自伝的作品と、母をモデルにした作品も書いている。なお、彼女はフィンランド人だが、母語はスウェーデン語であり、作品はスウェーデン語で書かれている。

25 年をかけて完結したムーミンシリーズは、作品ごとに趣が異なる。この差異は、構造や主題に着目すると、作品を経るごとに徐々に推移する「変化」であることがわかる。本稿では、ムーミンシリーズにおける「変化」は作家が物語の進行のために意図的に加えていった

Hosei University Repository

というよりも、作家自身の創作意識の変遷が作風に影響をもたらした結果という見方が可能であることを示したい。方法として、作品が変化していく過程を具体的に分析し、その結果とヤンソンの発言との照応をもとに考察を進める。

第１章　スピーチ内容「安全と災難」とムーミン前期作品の構造の合致

この章では、国際アンデルセン賞受賞スピーチの内容の整理とムーミンシリーズ５作目までの作品分析を行うことにより、スピーチの中で「安全と災難（safety and catastrophe）」がどのように述べられ、実際に作品ではどのように表現されているかを示し、さらに「安全と災難」の構造の崩壊過程を追う。

第１節　国際アンデルセン賞受賞スピーチの内容

ヤンソンは、1966 年に『ムーミン谷の冬』（1957）で国際アンデルセン賞を受賞した。彼女は、このときの受賞スピーチで「子どもの世界」の一側面としての「安全と災難」について、またそうした世界を大人が書く理由について述べた。以下に、その重要な箇所を抜粋する。

> きょうお話ししたいのはこの [子どもの] 世界についてです。なかでも、子どもの世界に多い側面のうちのふたつ、つまり安全と恐怖についてお話ししましょう。
>
> ときおりふしぎに思うのです。子どもの世界をあとにしてひさしい人々が、突如として、子どものための物語を書きはじめるのは、いったいどういうわけなのでしょう。そういうときは、本当に子どものために書いているのでしょうか。むしろ、悲劇にせよ童話（ナーサリーライム）にせよ、自分の愉しみ、あるいは悩み

Hosei University Repository

のために書いているのではないでしょうか。（中略）愉しみがつねに童話の原動力であるとはかぎりません。大人の共同体には存在しにくい、本質にかかわらない底荷（パラスト）、つまり子どもっぽさを脱却しようとしているのかもしれません。それとも、薄れていく何かを描こうとしているのかもしれません。自分自身を救うために書くこともあります。責任がなく、柔軟な、あの「なんでもあり」の世界にもどるために。

子どもの世界は、原色で描かれた風景画です。そこでは、安全と災難（カタストロフ）が互いに養分をあたえあいながら併存しています。そこではあらゆるものに場所があり、一切が可能です。非合理なものが極めて明晰かつ論理的なものと混ざりあっています。夢の特性である超現実空想的な設定に織りこまれた日常の現実があります。（中略）

日常性のうちにひそむ興奮と、空想のうちにひそむ安全とのあいだで完璧な均衡をたもてるのは子どもだけだと思います。みごとな自己防衛の手段です。脅威と凡庸という諸刃の刃をかわす手段なのです。

おそらく子どもの本の作家は、この危なっかしい均衡をとりもどそうとしているのです。日常のつまらなさに息苦しくなり、あの失われた非合理をもとめているのかもしれません。あるいは、恐怖におそわれて、安全な場所への帰り道をさがしているのかもしれません。（中略）

作家が読者に果たすべき義務がひとつあります。それは、しあわせな結末です。あるいはまた、子どもがさらに物語をつむぐことができるように開かれた道です。（中略）

災難は待ちに待った冒険の成就にほかならず、書物よりも、さらにはファンタジーよりも真実なのです。そして災難と肩を並べて存在するのが安心です。つまり小さな空間にもぐりこんだ子ど

Hosei University Repository

もが手に入れる完璧な安全なのです。[1]

「子どもの本」のひとつの形として、子どもたちを怖がらせる一方で楽しませもする「災難」を提示し、それが解消して「安全」に至る構造があり、またこうした本は「しあわせな結末」で結ばれるべきであると彼女は言っている。「災難」あってこその「安全」、「安全」を際立たせるための「災難」、という意味で、これらふたつは対になる要素である。ムーミンシリーズの初期の作品は、洪水や彗星といった「災難」の解消とともに物語が終わり、「災難」が訪れる前の元いた場所での「安全」な世界に戻るか、新しい「安全」な場所に至る。これらは、まさに彼女がスピーチで述べた内容に合致する筋書きである。「安全と災難」の扱われ方は作品ごとに異なっており、その差異は「変化」としてとらえることが可能である。「安全と災難」の構造は、シリーズが進むにつれて失われていくが、次節以降ではその過程を見ていきたい。なお、参考として章末には重要な出来事を抜粋して図式化したストーリー表を載せている。表にした作品は、『ムーミン谷の彗星』、『ムーミンパパの思い出』、『ムーミン谷の夏まつり』と、次章で扱う『ムーミン谷の冬』である。

第2節 「安全と災難」の表現:『小さなトロールと大きな洪水』、『ムーミン谷の彗星』

ムーミンシリーズ第1作目『小さなトロールと大きな洪水』(1945)と第2作目『ムーミン谷の彗星』(1946)は、1966年にヤンソンが国際アンデルセン賞受賞スピーチで後に語ることになる「子どもの世界」が表現されているため、彼女が「子どものための本」と考える内容が典型的に表現されている作品であるといえよう。「安全と災難」が併存し、「しあわせな結末」に至る物語とはどのようなものであるか、これらの作品の構造を分析することにより明らかにしたい。

Hosei University Repository

ムーミンシリーズ第1作目『小さなトロールと大きな洪水』は、ムーミントロールとムーミンママが、スニフやチューリッパ、赤い髪の少年を友人として迎え入れながら、冬を越えるための新たな住居と行方知れずのムーミンパパを探す物語である。「大へび」に追いかけられたり「ありじごく」に襲われたりしつつパパを探す旅を続けているうちに、大雨が降り、洪水が起こる。あたり一面が水に囲まれてしまい困り果てたところに、コウノトリが現れるが、彼は失くした眼鏡をムーミントロールが見つけたことの恩義に、パパの捜索に協力しただけでなく、一行を陸地に運んだ。その翌日には水が引き、パパと再会を果たしたムーミントロールたちが周囲を歩き回っていると、小さな谷に流れ着いたムーミンパパの家を見つけた。スニフとムーミン一家はそこで新しい生活を始めることになった。

この作品では、旅の道中に出くわす生き物や出来事といった小さな災難が生じ、何らかの形でそれが解消され安全に至り、また次の災難が生じる、というように災難とその解消のエピソードが連なっている。こうした安全と災難の繰り返しの末には、パパとの再会と家の獲得という旅の目的が達成され、しあわせな結末を迎える。

第2作目『ムーミン谷の彗星』は、彗星が地球に衝突する見込みで接近し、結局は軌道をそれて地球から遠退くまでのムーミン一家の様子を主に描く物語である。平穏なムーミン谷に突然黒い雨が降り、この雨のために住居を失ったじゃこうねずみは、ムーミンたちの家（ムーミンパパ、ムーミンママ、ムーミントロール、スニフが住んでいる）に住み着いた。彼は、黒い雨は地球が滅びる前兆であると言い、ムーミントロールたちに宇宙の大きさと地球の小ささを教えた。地球を価値のないもののように感じて気力をなくしたムーミントロールとスニフを見かねて、パパとママは二人が星のことばかり考えるならば、星

Hosei University Repository

を観察させようと考え、彼らを天文台へ行かせた。ムーミントロールとスニフは旅の途中でスナフキンに出会った。彼を一行に加えて天文台に行き、そこで彗星が地球に直撃すると予測されていることと、その日時を学者に聞いた。天文台から帰る途中でスノークとその妹のスノークのおじょうさんが一行に加わり、ムーミン谷へ戻ると、地球に直撃するはずだった彗星は軌道をそれ、地球をかすめたにすぎなかったため、事なきを得て平穏が戻った。

ここでの「彗星」は、今作品最大の災難であり、この災難が去ったあとの安全が、しあわせな結末である。この大きな災難が解消されるまでの間に、小さな安全と災難が何度か繰り返される。安全と災難の繰り返し、という特徴において、『小さなトロールと大きな洪水』と『ムーミン谷の彗星』は共通している。また、今後の変化に際して重要な特徴がある。それは、これらの作品では小さな災難がそれぞれ単発的な出来事として生じるが、災難の多くは偶然により解消することである。

なお、『ムーミン谷の彗星』および次節で扱う『ムーミンパパの思い出』は共に 1968 年に改訂版が刊行されたが、日本語版は、共に改訂版の翻訳である。W.G ジョーンズは、著書 *Tove Jansson*（1984）において、『ムーミン谷の彗星』の改訂に関して以下のように記述している。

> 1946 年版よりも短い 1968 年版 [*The Comet is coming*] は、根本的に修正されたというよりは、文体が変更され、小説における構造が堅固なものとなっている。説得力が増し、場合によっては、最も適切なメタファーを使用することの重要性についての作家の意識が高まっていることを指す多数の変更がある。説明的な文章は短く、多くの場合で適切になっている。ユーモアは時々いっそう手が込んで相応しいものになっているが、ひょっとしたら、わずかに [1946 年版の]*Comet in Moominland* よりも大人らしいかもし

Hosei University Repository

れない。（中略）

2 冊が別々の作品として考えうるほど変更は根本的ではないけれども、新版の *The Comet is coming* は一見したところでは、改良があることに疑いはない。描写はより現実的になり、筋はより綿密に関連を持つようになっている。具体的な状況における個々の相互作用は、より登場人物たちに見合うように変えられた。説明と解説の文は、より説得力のあるものに改められた。意図は全体的に明確になり、不要なエピソードと登場人物は取り去られた。あるエピソードから他のエピソードへは適切に移行されている。ファンタジーはまだ存在するが、抑えられている。（中略）彼女の本文は、[買い物をする場面での] 価格の更新か、そうでなければ時代を想定しうる用語の除去によって、明らかに年代を想定しうる特徴をなくし、モダニズム的な側面を持っている。[2]

ジョーンズは、根本的な修正はないとした上で細部の修正について述べている。著者は、こうした細部の変更に関しては、安全と災難の構造を変容させる大きな変更ではないと判断し、本稿では取り扱わないこととした。原書の初版を入手することは困難であるが、流布している英語訳は 46 年版の翻訳であるため、こちらを検証することにより改訂前後の差の分析も別の機会に行いたい。ジョーンズが触れていない『ムーミンパパの思い出』の改訂については、検証方法も含めて考えていきたい。

第 3 節　「災難」の弱体化：『たのしいムーミン一家』から『ムーミン谷の夏まつり』まで

第 3 作目『たのしいムーミン一家』（1948）、第 4 作目『ムーミンパパの思い出』（1950）、第 5 作目『ムーミン谷の夏まつり』（1954）は、安全と災難の構造が失われていく過渡期の作品である。これらの作品

Hosei University Repository

は、安全と災難の構造を保持しているが、災難の役割は弱体化している。ここに重点を置き、3 作品を分析していきたい。

『たのしいムーミン一家』の原題は *Trollkarlens hatt* であり、これを直訳すると「魔法使いのぼうし」となる。この作品は、題名のとおり、魔法使い（翻訳では「飛行おに」となっている）のぼうしと、飛行おににまつわる物語である。ムーミントロールたちが拾った「まっ黒いシルクハット」は、飛行おにの古いぼうしだった（これは終盤に判明する）。「ぼうし」の中に入ったものは姿が変わり、ぼうしのこの力によってさまざまな騒動が起きた。また、飛行おには「ルビーの王さま」と言われる大きなルビーを探していたが、これは「モラン」の持ち物であった。モランのもとからルビーの王さまを持ち出したトフスラン、ビフスラン夫妻はムーミン谷に滞在することとなったが、そこにルビーを取り返すためにモランが訪問した。モランは、ルビーの代わりにムーミン谷では厄介な代物となっていた魔法のぼうしを価値あるものと諭されて持っていき、ルビーの問題は一旦解決した。のちに飛行おにがルビーを求めてムーミン谷を訪れるが、夫妻はルビーを譲らなかった。ルビーの王さまを諦めた飛行おには、自分への慰めのため、一同の願いを魔法で叶えた。飛行おにが自らの姿を変える魔法と他人の望みを叶える魔法しか持たないことを知った夫妻は、飛行おにに彼のための「ルビーの王さま」と同様のルビーを出すことを頼んだ。これによって飛行おにの望みも叶い、みなが幸福となった。

飛行おにのぼうしは、中に入るものの姿を変えることによって小さな災難を引き起こした。例えば、ムーミントロールを周囲が彼であると判断できないほど「とてもへんなすがた」に変えたり、じゃこうねずみの入れ歯を変質させたり、家を覆い尽くして部屋をジャングルにするほどに植物の一片を成長させたりする、といった具合である。しかしながら、これらの小さな災難は、前作までのようにムーミントロー

Hosei University Repository

ルたちを脅かす性質のものではない。家の中にジャングルが出来た際は、ターザンの真似事をして楽しんだほどである。その他にもこのぼうしは、卵の殻を雲に変えたり川の水をジュースに変えたりと、一家を楽しませる役割も果たした。さらに、この作品では、災難の解消としあわせな結末との結びつきが弱まり、災難としあわせな結末との関係にも変化が生ている。多くの騒動の原因であったぼうしを手放すことに成功し災難は解消するが、これは結末ではない。この作品で結末として配置されているのは、みなの願いが叶うことである。また、「ぼうしを手放すこと」とみなの願いがかなうという結末へ向かうにあたり重要となる「飛行おにの訪問」との間には、直接的な関連がなく、災難の解消と結末は乖離している。ムーミンママの提案によりぼうしはモランの手に渡ったが、飛行おにがムーミン谷をめがけてやってきたのは、ママがなくした（実際にはトフスラン、ビフスラン夫妻が持ち出した）ハンドバッグが見つかったことを祝うパーティでトフスラン、ビフスラン夫妻がみなに見せたルビーの輝きを月から発見したためである。

次に、『ムーミンパパの思い出』は、ムーミンパパが自らの過去を「思い出の記』として書きながら、一章書き終えるごとに息子たちに読み聞かせる、というように、二つの時制が交互に記されている作品である。章末の図は、作品に描かれている順序ではなく、出来事を時系列で並べ替えたものである。作品の冒頭でムーミンパパは風邪をひき、もしこのまま死ぬならば自分の過去を知る者がいないだろうと悲しんだ。その姿を見たムーミンママは「思い出の記」を書くことを彼に勧め、パパは執筆を始めることとなった。パパは子どもの頃に規律に厳しいヘムレンおばさんが管理する「ムーミン捨て子ホーム」という孤児院から家出し、友人を得て冒険をした経験からママとの出会いまでの出来事を綴り、書き進むごとに息子のムーミントロールとその友人

Hosei University Repository

のスニフとスナフキンに読んで聞かせた。すべてを書き終え読み聞かせが終わった時、ちょうどパパの旧友たちが冒険の途中に来訪する。再会を喜び、パパは翌朝家族と旧友たちとともに冒険に行くことなり、新たな門出を迎えたところで作品は終わる。

この作品では、パパの書く「思い出の記」の中に安全と災難がある。これらの災難は、過去の出来事であるため、読み聞かせている時点においては脅威とならない。それゆえ、『ムーミンパパの思い出』全体として見るとそれらの出来事は、災難としての役割が弱いと言える。また、前作と同様に、災難の解消と結末との関連性も弱体化している。今作の結末はムーミンパパの過去の望みであった冒険が果たされることであるが、これは災難を解消した結果ではない。さらには作品全体を貫く災難が存在せず、災難のモチーフ自体が重要性を失っていると考えることができる。

『ムーミン谷の夏まつり』は、ムーミン一家（友人もふくむ）が火山の噴火の影響で起こった洪水のために浸水した家を離れ、ムーミン谷に戻るまでの物語である。ムーミン谷にある家は洪水によって屋根まで水に浸かり、一家（ムーミントロール、ムーミンパパ、ムーミンママ、スノークのおじょうさん、ちびのミイ、ミムラねえさん（ミイの姉））は水上に浮かぶ劇場に移り住み、路頭に迷う少年ホムサと少女ミーサを迎え入れた。流されるうちに、ムーミントロールとスノークのおじょうさんが陸地に取り残されたり、ミイが劇場から転落して流されたりし、一家は離れ離れになった。劇場に残った者たちが居場所を知らせるために、もともと劇場に住んでいたエンマに芝居や劇場について教わり、劇場が流れ着いた場所で演劇の上演を行った。人々が集まる場を設けたことによって、一家だけでなく旅からムーミン一家のもとへ戻る途中のスナフキンとも再会した。そうしている間に次第に水が引き、一家は谷へ向かう帰路につき、漂流や旅の途中で出会っ

Hosei University Repository

た者たちはそれぞれにふさわしい居場所を見つけた。作中でムーミン一家は、劇場や芝居という概念を全く知らず、結局最後まで悲劇の構成や韻律を完全には理解しないままだが、観客を巻き込み、現実と芝居の区別がつかなくなった状態で上演は進み、脚本どおりにならなかったものの、一家再会の目的は果たされることとなった。

この作品における洪水は、物語を進行させるための原動力となっている。家を離れることに始まり、一度行き着いた陸地にムーミントロールとスノークのおじょうさんを置いて劇場が流れてしまったこと、ミイが劇場から落ちて流されたことなど、洪水はストーリー展開のきっかけを作っているのである。しかしながらこの洪水は、『小さなトロールと大きな洪水』における洪水のように、登場人物たちをおびえさせはしないという点で、災難の役割の弱体化を指摘することができる。また、やはりここでも災難の解消としあわせな結末との結びつきは弱い。前作とは異なり、災難は役割が弱いながらも作品を貫いている存在ではあるが、今作におけるしあわせな結末は洪水の水が引くことではなく家族や友人の再会である。

ムーミンシリーズ第 3 ～ 4 作目は、形式的には安全と災難の構造により成り立っているものの、災難の役割が弱体化しており、その内実は初期の作品とは異なっている。ぼうしや洪水、その他の出来事は登場人物たちが解消あるいは解決すべき事象ではあるが、これらは初期の作品にあるような脅威としての災難ではない。こうして災難の役割が弱まると同時に、安全もその意味を縮小させている。災難の解消がしあわせな結末の直接的な要因でないのは、災難と安全が大きな意味を持たなくなったこととの相互作用による結果だろう。

Hosei University Repository

【ストーリー表】

『ムーミン谷の彗星』ストーリー表

黒い雨
スナフキンとの出会い

災難	安堵
大トカゲに遭遇	逃げる
地底に降下	貴金属類の好きなヘムレンが回らずも助ける
わしに襲われる	わしが嵐いを追し、去る

(災難)天文台で彗星の接近を知る

アンコスジーラに襲われる	逃治
大タコに襲われる	おじょうさんの眼に彗星が反射、タコ逃げる
いなごの大群遭遇の巻沿いに	大群、遭遇。被害なし
あらしに飛ばされる	ヘムレンのスカートをパラシュートにし、家まで飛ぶ

(安全)彗星の軌道がそれ、平穏が戻る

『ムーミンパパの思い出』ストーリー表

ムーミンパパ 等『思い出の記』(過去の出来事)

パパ、を家出、仲間に出会い、冒険開始
貴のエドワードを解して出航

災難	安堵
船に大量のニブリングが侵入、パパを追ってきた海賊隣のおばさんがを救助し、乗船させる	おばさん、ニブリングの怒りを買い、連れて行かれる。一石二鳥。一匹のニブリングが船に残り、行動を共にすることとなる
あらし	嵐に襲せられ上空へのぼり、助かる
怒ったエドワードに再会	襲ってきた嵐を潜し、氷をそらして逃げる

行き着いた先の王様の国政会でフレドリクソンは王室付き発明家になったことを関機に冒険は終了。海辺に定住しあたらしい付づくり開始

おばけがらの襲からせ	フレドリクソンの提案より解決
フレドリクソンの空飛ぶ船、試験飛行と入水。海上でうみいぬに襲われる	エドワードが回らずも逃治

ママが海辺に流れ着く

(揺かれない時間)
ムーミンパパの墓碑、『思い出の記』を綴る決意
執筆と家族・友人への語り聞かせ
旧友の来訪と旅立ち

『ムーミン谷の夏まつり』ストーリー表

火山の噴火による洪水
ムーミンの家は浸水、漂流する劇場に移住

劇場(停止)
パパ　ママ　エンマ　ムーミン　おじょうさん
ミムラねえさん　ミイ　ホムサ　ミーサ

劇場(漂流)
パパ　ママ　エンマ
ミムラねえさん
ホムサ　ミーサ

公園
スナフキン
森の子どもたち
公園番
＋ミイ

置き去り
ムーミン
おじょうさん

陸地
ムーミン
おじょうさん
＋フィリフヨンカ
警官　小さなヘムル

再会
水が引く

劇場(停止)
パパ　ママ　エンマ　ミムラねえさん　ホムサ　ミーサ
芝居の見物客
＋ムーミン　おじょうさん　警官　小さなヘムル
スナフキン　森の子どもたち　ミイ

帰宅
新たな居場所への定着

(同じ場所)

劇場(停止)
エンマ　ホムサ　ミーサ
森の子どもたち
(留まることとなった)

ムーミン谷
パパ　ママ　ムーミン　おじょうさん
ミイ　ミムラねえさん　スナフキン
警官　小さなヘムル

家
警官　小さなヘムル

注記
太い矢印は時間の経過を意味する。
『ムーミン谷の夏まつり』の表で、細い矢印は移動を指す。また、ムーミントロールを『ムーミン』、スノークのおじょうさんを『おじょうさん』ムーミンパパとムーミンママをそれぞれ「パパ」「ママ」と省略している。

『ムーミン谷の冬』ストーリー表

(ムーミントロールの様子)
冬眠からの目覚め
トゥーティッキーから冬を教わる
氷盤の遭遇とりすの死
冬の動物たちのかがり火見物
ご先祖様との出会い

(出来事)
新しい客たちの訪問

(挿入話)
ヘムレンに憧れるサロメちゃんがヘムレンを探しに行き行方不明になる。ヘムレンは彼女を探しに行く。

犬のめそめそは自身を狼の仲間であると考え接近するが、襲われそうになる。ヘムレンの吹くホルンの音が彼の危機を救う。

ヘムレンはサロメちゃんとめそめそを伴って谷を後にする

ヘムレンを受け入れる

春の訪れ
季節の連続性の理解

Hosei University Repository

第２章　「安全と災難」の構造を持たない後期作品

一章で見てきたように、ムーミンシリーズの初期の作品にある「安全と災難」の構造は、次第に災難の役割が弱まり同時に安全の意味も縮小していく形で変化してきた。しかしながら、ここまでの作品は形式的な次元では類似している。それは、出来事とそれに対する登場人物たちの行動、すなわち筋書きが物語を進行させる点である。第６作目『ムーミン谷の冬』（1957）以降の作品は、筋書きよりも登場人物たちの心理描写に重点が置かれるようになり、それと同時に作品に災難は存在しなくなる。

第１節　実質的な災難の不在：『ムーミン谷の冬』

『ムーミン谷の冬』は、冬眠から目覚め、初めて冬の世界を経験することになったムーミントロールが春を迎えるまでの様子を描く作品である。ムーミントロールたちは、冬眠する生き物だが、ある冬、ムーミントロールは、不意に目覚めてしまい、再び冬眠に戻ることができなくなった。ムーミントロールは、彼のすぐ後に同じく目覚めたちびのミイと、この冬に水浴び小屋で暮らしていた「おしゃまさん」とともに冬を過ごすことになった。ムーミン谷では冬に雪が降り景色が変わるだけでなく、夏と冬とではそこに住むいきものたちも異なる。夏の生き物が冬眠する冬には、夏に息を潜めていた生き物が出てくる。さまざまな面で夏の常識が通用しない冬の生活、冬に姿を現す生き物や食べ物を求めてムーミン谷にやってくる客たちとの関わりを通してムーミントロールは成長を遂げた。なお、この作品にはムーミントロール以外の登場人物が中心となる箇所もある。

ムーミンシリーズのこれまでの作品と『ムーミン谷の冬』との大きな違いは、実質的な災難が存在しないことである。ムーミントロール

Hosei University Repository

が冬の景色を初めて目にした時の様子は以下のように描写されている。

> ジャスミンの木は、一まいも葉がなくて、ただのきたないかれえだのしげみになっています。
> (これは死んでしまったんだ。ぼくがねむっているあいだに、なにもかも死んでしまったんだ。この世界は、きっと、ぼくが知らない、だれかほかのやつに、占領されちまったんだろう。きっと、モランのしわざだぞ。もう、この世界は、ムーミンのものじゃないんだ)
> こんなふうに、彼は思いました。[3]

ムーミントロールは、冬を「だれかほかのやつ」による「占領」された状態であると考えている。しかし冬は、彗星のような外部からの脅威でもなく、彼を襲いに来た生き物でもなく、洪水のような天災でもない。ここでの冬は、初期のムーミンシリーズにあったような、彼を脅かす性質のものとして描かれていない。彼は春を迎える時に冬が脅威でないことに気づくが、その中途で様々な事柄を理解していった。それは例えば、雪が生えてくるのではなく降ってくるのだということ、生き物は死ぬこと、冬の生き物独自の慣習や習性などである。ジョーンズは、『ムーミン谷の冬』におけるムーミントロールについて、以下のように述べている。

> とても早い段階で、ムーミントロールが水浴び小屋をムーミンパパのものであると話した時、彼にはすぐに理解できないが、実際には曖昧でない言葉でトゥーティッキー は答える。すなわち彼女は、「あんたのいうとおりかもしれないけど、それがまちがいかもしれなくてよ。そりゃ、夏には、なるほどこの小屋はあん

Hosei University Repository

たのパパのものでしょうさ。でも冬にはこのトゥーティッキーのものですからね。」と言ったのである。場所も同じ、環境も同じだが、リアリティは異なり、ムーミントロールが今まで絶対的な真実として理解できたものは、彼の新しい [冬の] 生活において相対的な真実となる。[4]

ムーミントロールは、夏の生活を絶対的なものと認識していたため、彼にとって冬は災難同様だったと解しうる。冬の経験によって、彼にとっての現実は、相対的な意味を持った。一例を上げるならば、冷気で生き物を殺す氷姫によって命を絶たれたリスを目の当たりにし、死を理解した彼は、生にも目を向けるようになった。以下の引用は、作品の終盤で春の訪れとともに目覚めたスノークのおじょうさんとムーミントロールとの会話の場面である。

ところでスノークのおじょうさんが、ことしはじめてでた、元気のいいクロッカスの芽を見つけました。それは、南側の窓の下の、日なたの土から顔をだしていたのです。でも、まだ、みどり色にはなっていませんでした。
「この上にガラスをおいてあげましょう。夜中にさむくなってもだいじょうぶなように」
こう、スノークのおじょうさんはいいました。
「いや、そんなことはだめさ。自分の力で、のびさせてやるのがいいんだよ。この芽も、すこしはくるしいことにあうほうが、しっかりすると、ぼくは思うな」
こう、ムーミントロールはいいましたが、そのとききゅうに、とてもうれしくなって、なんだか、ひとりになりたくなりました。[5]

Hosei University Repository

この場面は、これまで物事の解決を他者に頼ってきたムーミントロールが、自力で苦難を乗り越える必要性を知り、成長という変化を遂げたことを示す箇所でもある。冒頭で目覚めたムーミントロールは初めにママの元へ向かい、次には冬が訪れる前に旅立ったスナフキンを追うことを考えている。また、これ以前の作品においても、ムーミントロールは物事の解決を他者に委ねている。例えば、『ムーミン谷の彗星』では、彗星が地球に接近していることがわかった時、家に帰れば両親が解決策を見つけ出すだろうと考えていたり、あるいは、天文台を往復する道中の判断はスナフキンに任せていたりしていた。しかしながら、初期の作品における問題の多くは偶然に解決したり、他者が解決を促したりしていたため、ムーミントロールが自力で解決するものは少なかった。

また、『ムーミン谷の冬』の構造は、これまでの作品における安全と災難によく似ているが、実質的な災難が存在せず、物理的な問題とその解消よりも主人公の成長が中心となって描かれている点で大きく異なったものとなっている。すなわち、外的な事象の変化から、内的なものとしての心理的変化へと表現内容の比重が移行したということである。作品全体はいくつかのエピソードによって構成されているが、それらは解消あるいは解決しなければならない問題を扱うものではなく、ムーミントロールが対象を理解する過程が提示されたものである。この作品で中心的に描かれているのは、ムーミントロールが災難であると一度は認識した冬を、現実のひとつの側面であると理解する過程であり、理解すべき対象である冬は、もはや災難とは言えない。

第２節　筋書きから心理描写への重点の移行：『ムーミン谷の仲間たち』から『ムーミン谷の十一月』

第７作目以降の作品には、もはや安全と災難の構造は形式的にも存在しない。

Hosei University Repository

ではまず、第7～9作目の内容を簡単に紹介する。

第7作目『ムーミン谷の仲間たち』（1962）の原題は *Det osynliga barnet och andra berättelser*（目に見えない子とそのほかの物語）であり、ムーミンシリーズにおける唯一の短編集である。9つの短編の中で、本のタイトルとなっている「目に見えない子」は、おばさんにいじめられ続けた結果姿が見えなくなってしまったニンニという女の子の姿が見えるようになるまでの物語である。おしゃまさんは姿の見えなくなったニンニを引き受け、ムーミントロールたちの家で過ごせばまた見えるようになると考え、そこへ連れて行った。よく躾けられてはいるものの、怒ることも笑うことも知らないニンニはムーミントロールとその両親、ちびのミイとの交流を通して、次第に顔以外は見えるようになった。ムーミン一家は冬が訪れる前にボートを引き上げるためにニンニを連れて海辺へ行った。そこでパパは、冗談でママを海へ落とすような仕草をして見せた。それを見たニンニはパパのしっぽに噛み付いて怒り、ついに顔も見えるようになった。

第8作目『ムーミンパパ海へいく』（1965）は、ムーミントロールとその両親、ちびのミイがムーミン谷を離れた小島で生活する様子を描いている。パパは、一家の主である自身が決断すべきことを家族に決められたことで存在価値を失ったと感じた。彼は住む環境や彼自身の身分を変えることで存在価値を回復しようとし、家族を連れて家を遠く離れた灯台のある小島での生活を始めることを決めた。そこでの経験を経て、パパは無理に一家の主であることを誇示せずとも一家をまとめる立場となりうることに気づいた。また、彼は島に到着して以来灯台守になろうと努めていたが、最終的には身分を変えなくとも単にムーミンパパであることに満足するに至った。

一方ムーミントロールは、島では両親と別に行動し、彼らに反抗意識さえ持っていた。その生活の中で彼は憧れを抱いた「うみうま」と

Hosei University Repository

分かり合えないことを認めたり、恐れを抱いていたモランに優しさを示したりするに至った。そのほかムーミンママにまつわるエピソードもある。

シリーズ最終作『ムーミン谷の十一月』（1970）は、ムーミン一家が不在の時にムーミン谷にやってきた6人の登場人物の共同生活を描く作品である。6人の登場人物とは、スナフキン、ミムラねえさん、ヘムレン、フィリフヨンカ、スクルッタおじさん、ホムサ・トフトである。彼らはそれぞれ目的をもってムーミン谷へやってきてムーミンの家でしばらく生活し、ムーミン谷、ムーミンの家、ムーミン一家に対する各々の記憶や理想を衝突させた。フィリフヨンカ、ホムサ・トフト、ヘムレン、スクルッタおじさんは、ムーミンに関することを全く知らないか、おぼろげな記憶しかなく、ほとんど理想を述べる。スナフキンは、一家と親交が深いが、多くを語らない。ミムラねえさんもまた一家と親交があるが、彼女の発言は誇張表現が多く、信ぴょう性に欠ける。

ムーミン一家に会うことはないながらも、6人は交流するうちにそれぞれ次第に満足し、ひとり、またひとりと谷を離れ、最後に残ったホムサ・トフトが帰ってきたムーミン一家を迎えようとするところで物語は終わる。

これらの作品においても、災難のような出来事を指摘できないことはない。

例えば、『ムーミン谷の仲間たち』の最終話「もみの木」で12月末に冬眠から目覚めてしまった一家が初めて経験するクリスマスや『ムーミンパパ海へいく』で島の木々が突如移動することである。「もみの木」でクリスマスを全く知らない一家は、冬の生き物がクリスマスの用意をするのを見て、「クリスマス」とは恐ろしい訪問者か備え

Hosei University Repository

の必要な事態ではないかと考え、見よう見まねで用意をした。結局何事も起こらなかったため、一家はクリスマスパーティのご馳走やもみの木、プレゼントを「はい虫」という小さな生き物たちに全て譲り、冬眠に戻った。クリスマスは、『ムーミン谷の冬』における冬と同様に実質的な災難ではない。また、彼らはクリスマスを回避することがなく、それゆえ安全も存在しないため、安全と災難の構造に当てはまらない。

『ムーミンパパ海へいく』における木々の移動は、一家に被害を加えるものではなかった。また一家はこの事態に驚きはするものの、とりわけこのために行動することはなく、状況の変化程度のこととして対処した。木々は、冷たさゆえ腰を下ろした箇所の土を植物の成長しない場所にする性質を持つモランから逃げるために移動していたものとみられるが、ムーミントロールがモランと交流したことにより彼女のこの性質は消失し、同時に木々も元の場所へ戻った。ミイは木々の変化を楽しんでいたため、状況の回復を残念がってムーミントロールをとがめたほどだ。

これらの作品で指摘しうる災難に類似する事象は、ごくわずかな要素である。彼らの身に起こる出来事は、もはや解消すべき災難というよりは心理的変化に関わるものとしての意味が強い。「安全と災難」がなくなったムーミンシリーズの最後の 3 作品では、主に心理的な問題が主題となっている。いくつかの作品で、登場人物たちは、他者との関わりによって「変化すること」あるいは「変化しないこと」という心理的変化に達する。例えば「目に見えない子」のニンニは感情を表現できるように変化し、『ムーミンパパ海へいく』において灯台守になろうとしたムーミンパパは従来の単なるパパに戻り、変化しないことを選ぶ。また、ジョーンズは『ムーミン谷の十一月』を「変化の小説」(A Novel of Transformation) と称しており、実際にこの作品はミ

Hosei University Repository

ムラねえさんを除く登場人物の変化を扱っている。殆どはどちらかの結論に到達するが、『ムーミンパパ海へいく』におけるムーミントロールは両方に結論づけられるため、一例として詳細を分析する。

ムーミントロールはうみうまとの関わりで「変化しないこと」に、モランとの関わりで「変化すること」に到達する。島で拾った5年前のカレンダーに描かれたうみうまに憧れを抱いたムーミントロールは、本物のうみうまを見るとさらに彼女に夢中になった。うみうまは、自分のことを褒める言葉しか聞かず、ムーミントロールのことをすきずきに呼んでばかにしてさえいた。ムーミントロールは、拾った銀のかなぐつを一頭のうみうまに贈ったが、次に会ったときのうみうまは、対になって行動していた。この際、うみうまたちは足を海に浸していたため、彼は結局かなぐつを渡したうみうまがどちらかわからず混乱し、それ以来うみうまのことを考える気を失くした。この後、ムーミントロールはムーミンママと以下のような会話をした。

「ママ、ぼく、うみうまたちに会ったんだよ。でもあいつらは、ぼくにはぜんぜん興味がないみたいだった。ぼくはあいつらといっしょに浜べを走ったり、いっしょにわらったりしたかっただけなの。あいつらはとてもきれいだったよ……」

ムーミンママはうなずくと、しんみりといいました。

「うみうまと友だちになるなんて、できない相談だと思うわ。だけど、だからといって、失望することはないのよ。きれいな鳥とか美しいけしきを見るのとおなじに、うみうまを見ることができたらそれで幸福だと思えばいいんじゃない」

「きっと、ママのいうとおりだね」

と、ムーミントロールはいいました。[6]

うみうまとの交流で、ムーミントロールは他者との関係を良好にす

Hosei University Repository

るための努力をやめ、相手と理解し合えない場合もあると認めるに至った。ママの発言への同意は、理解し合えない相手と不要な関係を築こうとしないこと、すなわち「変化しないこと」を理解したことを意味している。

一方でモランは、ムーミン一家のカンテラを追って島までついて来た。ムーミントロールは、モランのことを考えたりモランと話したりしてはいけないとママに言われていたが、両親の住む灯台までモランが行くことのないようにとの義務感で彼女にカンテラの灯りを見せることを習慣とした。ムーミントロールはモランと会ううちに、彼女に対する恐怖が不気味さとなり、さらに彼女へ「やさしい気持ち」を抱くまでになった。日が経って灯油が底をつき、ムーミントロールは灯りの灯っていないカンテラを持っていったにもかかわらずモランが踊る様子を見て、彼女が自分に会うことに喜んでいたことを知った。彼はモランが踊りを終えて去っていくまでじっと立っていた。恐怖の対象へ歩み寄り、優しさをもって接する態度を会得した点で、ムーミントロールは「変化すること」にも至っている。

終章　ヤンソン作品における変化の考察

これまで論じてきたように、安全と災難の構造を持つものとして始まったムーミンシリーズは、第5作目にかけて徐々に災難の役割を弱体化させていった。第6作目では形式を保ちながらも実質的な災難が存在しなくなり、それ以降の作品では心理的変化の描写が初期の構造に代わって作品を構成するようになった。

ヤンソンは『ムーミン谷の冬』で国際アンデルセン賞を受賞したが、ここで安全と災難のある「子どもの世界」について述べたにも関わらず、受賞作にはこれが表現されていない。『ムーミン谷の冬』が子どもの本から距離を置き始めていることを作家自身は意識的にしろ無意

Hosei University Repository

識的にしろ認識しており、それゆえ児童文学作家に贈られるこの賞を受賞した際、自身の考える子どもの本の内容に合致する初期の作品について語ったのではないだろうか。このスピーチを基点として改めてムーミンシリーズを読むことにより、「子どものための本」として書き始められたムーミンの物語が結果として彼女の考える「子どもの世界」を離れる過程を示すものとなっていることがわかる。ムーミンシリーズを書き終えた後、以下に引用する 1978 年のインタビューでは、ヤンソンはムーミンシリーズにおける変化を明らかに自覚しているようだ。

> 最初の本は、小さな子ども向けのとてもナイーヴで平凡な物語でしたが、以来、わたしの仕事は明らかな発展をとげ、それにつれて本もだんだん子どもっぽくなくなっていきました。やがて、どうしても子どものために書けないところまで行きついたのです。これは自然な変化だと思います。たぶんわたし自身がもはや子どもではなくなったからでしょう。もう子どもの本は書けないと完全に納得した段階に達したのですが、おとなだけを対象に本を書くという可能性は勇気がなくて考えられませんでした。絵の仕事に戻るのが一番かもしれないと思った時期もありましたが、その後自分の子ども時代について書くのはどうかと思いつきました。もちろんすでに『彫刻家の娘』[1968] を書いていましたがそれはもっと前でした。新しく書いたのは、『少女ソフィアの夏』[72] という、子どもよりもおとなに向けた本で、年老いた私の母と弟の小さな娘との友情を扱っています。
>
> でも本当は、『ムーミン谷の冬』[57] が一種の分水嶺になったといえるでしょう。まだ子ども向けの色彩の強い本ですが、この本ではじめて子どもの世界の外に一歩踏みだしました。ムーミントロールは冒険のかわりに困難に立ちむかい、その結果独自の

Hosei University Repository

キャラクターとしての特徴を帯びます。それまでは家族を脅かす危険な世界に囲まれながらもしあわせな結末にいたるまで遭遇するわくわくする冒険に家族みんなでいっしょに対処すればそれでよかった。うってかわってこの作品では、ほかのキャラクターたちが眠っているあいだに、ムーミントロールはまったく独力で理解できない世界で起こるできごとと向きあわねばならないのです。とはいえ物語の最後では、すべてが平常に戻ります。同じことがもっと劇的に『ムーミンパパ海へいく』[65] で起こります。そこでは家族の一致が乱され、危険な世界一丸となって立ち向かうしあわせな共同体ではなくなり、みんながそれぞれにおとなになるプロセスの途上にあるといえます。[7]

ヤンソンは、ムーミンシリーズは「子どもっぽくなくなっていき」、最終的に彼女自身が「子どものために書けないところまで行きついた」と述べている。彼女が分水嶺であると認めている『ムーミン谷の冬』において、ムーミントロールは「困難に立ち向かい」、「独力で理解できない世界で起こるできごとと向きあ」い、最後には「全ては平常に戻」る、とヤンソンは言うが、結末は災難を解消した安全の状態とは異なる。最終的にムーミントロールは、冬という季節や自力での問題解決の必要性を理解した点において、成長を遂げている。すなわち、状況は回復したが、登場人物の内面は戻ったのではなく変化したのである。この変化は、ムーミンシリーズが子どもの本を離れ始めた証拠である。さらに、ヤンソンは『ムーミンパパ海へいく』について「みんながそれぞれおとなになるプロセスの途上にある」と述べたが、ムーミンパパにおける自己の容認やムーミントロールがうみうまやモランとの交流で学んだ他者との関係性がこれに該当するといえよう。

最後に、ムーミンシリーズの変化とヤンソンの意識について考察を加えたい。国際アンデルセン賞受賞スピーチを再び参照すると、ヤン

Hosei University Repository

ソンは童話を書く動機について、「子どもっぽさを脱却しようとしているのかもしれ」ない、と述べ、ムーミンシリーズが子どもの本から距離を置き始めていることを示唆した。また、第一章では引用していないが、別の箇所で、彼女は以下のように述べている。

> ときに、そこ [（子どもの世界）] へ行く道は閉ざされてしまいます。もう一度あのころの感覚をとりもどせないまま、何年もすぎていくこともあります。おとなの世界につきものの煩わしさや苛立ちのなかにあっては、安全は決まりきった習慣となり、災難はその魔法を失います。論理から生きのよさがきえてゆき、非合理なものはつまらない混乱や不適応になりさがります。[8]

ヤンソンは、66 年のスピーチの前年、65 年に出版した『ムーミンパパ海へいく』において、既に子どもの本にあるべきでないとする「おとなの世界の煩わしさ」をパパやママの悩みとして表現していた。彼女は、子どもの本としてあるべき姿を明確に把握していながら、自らその枠を脱する作品を書いている。彼女自身の理想と実際の作品に書かれている内容が次第に離れていくことから、ムーミンシリーズにおける変化が物語の進行上の理由ではなく、作家の創作意識が変わった結果であるとわかる。

本稿は、ムーミンシリーズとヤンソンのふたつの発言をもとに論じてきたが、作品の変化を分析するにあたっては、その背景を踏まえることも必要である。例えばトゥーラ・カルヤライネンは、ヤンソンの伝記の中で、『たのしいムーミン一家』では「どんな災害もムーミン谷を脅かすことはなく、どこにも逃げたり隠れたりする必要がない」と指摘し、その理由は終戦による平和の訪れであると述べている。また、ヤンソンは児童文学に並行して漫画のムーミンシリーズも執筆しており、児童文学の刊行は彼女の創作意欲だけでなく、漫画の人気に

Hosei University Repository

よる後押しもあってのことだと推測できる。作品内部と作家の認識にとどまらず多角的な視点から考察することが今後の課題である。また、ムーミンシリーズ前後の文学作品にまで分析の対象を拡大していきたい。

〈使用テクスト（原書の出版年順）〉
ヤンソン 著 冨原眞弓 訳『小さなトロールと大きな洪水』講談社 2011
ヤンソン 著 下村隆一 訳『新装版 ムーミン谷の彗星』講談社 2011
ヤンソン 著 山室静 訳『新装版 楽しいムーミン一家』講談社 2011
ヤンソン 著 小野寺百合子 訳『新装版 ムーミンパパの思い出』講談社 2011
ヤンソン 著 下村隆一 訳『新装版 ムーミン谷の夏まつり』講談社 2011
ヤンソン 著 山室静 訳『新装版 ムーミン谷の冬』講談社 2011
ヤンソン 著 山室静 訳『新装版ムーミン谷の仲間たち』講談社 2011
ヤンソン 著 小野寺百合子 訳『新装版 ムーミンパパ海へいく』講談社 2011
ヤンソン 著 鈴木徹郎 訳『新装版 ムーミン谷の十一月』講談社 2011

〈参考文献（Tove Jansson の日本語表記はそれぞれの書籍および記事に従った）〉
トゥーラ・カルヤライネン 著 セルボ貴子・五十嵐淳 訳『ムーミンの生みの親、トーベ・ヤンソン』河出書房新社 2014
トーベ・ヤンソン 安達まみ訳「私の本とキャラクターたち」『ユリイカ』青土社 1998 第 30 巻 5 号 pp. 80-87
トーヴェ・ヤンソン 冨原眞弓 訳「国際アンデルセン賞受賞スピーチ」『ムーミン画集』講談社 2009 pp. 106-109
Jansson, Tove. "Acceptance Speech of WINNER OF THE HANS CHRISTIAN ANDERSEN AWARD 1966." *Bookbird* 4（1966）: 3-6. Austrian Literature Online. Web. 30 Oct. 2014.
Jones, W. Glyn . *Tove Jansson*. Boston: Twayne Publishers, 1984. Print

(Endnotes)

〔注〕

[1] トーヴェ・ヤンソン「国際アンデルセン賞受賞スピーチ」『ムーミン画集』pp. 106-108

Hosei University Repository

[2] Jones, *Tove Jansson* , Chapter *Comet in Moominland* and *The Comet Is Coming*, pp. 19-23
（日本語訳は、本稿著者による。なお、以降のジョーンズの引用も同様である。）

[3] ヤンソン『ムーミン谷の冬』p.19

[4] Jones, *Tove Jansson* , Chapter Seven *Moominland Midwinter,* p.58

[5] ヤンソン『ムーミン谷の冬』 pp. 212-213

[6] ヤンソン『ムーミンパパ海へいく』pp. 258-259

[7] トーベ・ヤンソン「私の本とキャラクターたち」『ユリイカ』p. 80

[8] トーヴェ・ヤンソン「国際アンデルセン賞受賞スピーチ」『ムーミン画集』pp.106-107